

レスター大学工学部校舎 1963年

ジェームス・スターリング+ジェームス・ゴーン

独自の機能空間の立体的統合

戦後復興期の1950年代、モダニズム建築が主流になり世界中に普及した。普遍性、国際性を重視した建築に対し各国で地域性や伝統との関係が問われ、北欧、日本、メキシコなどで土着化の努力がなされた。一方、空間構成がマンネリズム化して、批判が起きる。

'50年代末から'60年代初頭にかけて、その乗り越えの試みが起こり、欧州ではCIAMを批判する建築家達がチームXを結成した。米国ではルイス・カーンが幾何学的な空間構成を追及して注目される。同時期、英国に、カーンの静的な形式性と対照的なスターリングとゴーン設計のレスター大学工学部校舎が完成した。

レスターはイングランド中部の中規模都市で、敷地はキャンパスの奥の北側を公園に接する変形地。

工学部校舎なので、重量機械を配置する平面的広がりが必要とする実験工作室や、実験台を備えた教壇机がある階段教室、窓側外周部に実験台を回した実験室棟と事務棟が主な構成要素である。実験工作室が敷地の過半以上を占め、他の諸室を平面的に別棟で配置する余地はない。その実験工作室の1階立ち上がり壁の高さに揃えたクロークやトイレを収めた外装煉瓦の基壇を、ピロティを入り口ホールとする高層の事務棟を挟んで配置し、その基壇の屋上の2階へ斜路で導き、そこにも入り口を設けている。事務棟の3、4階には壁構造の2層分の階段教室を抱え込むが、横幅が大きく、事務棟の架構からはみ出し、片持ち出しになる。5階から7階を事務室とし、実験に必要な水圧を得られる地上30mレベルに水槽を載せている。事務棟は高架水槽塔でもあり、この水槽重量を片持ち出し階段教室とバランスさせる力学的な抑えにもしている。

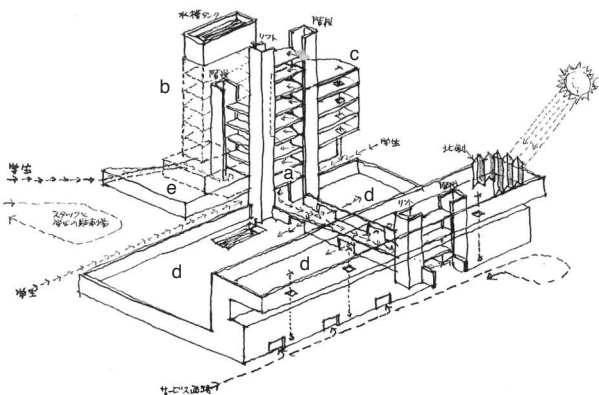
実験工作室の鋸状のガラス屋根は、北側採光のため建物の南北軸に対して45度にセットし、南面する内側には断熱ボードを貼って遮光している。エレガントに収めた端部は何かの結晶体のようである。

階段教室の床の裏面は迫り上り、ピロティ入り口のキャノピーとなって、学生を迎い入れる。昇降機シャフトと階段塔の間は透明ガラスサッシュ、壁は内外とも同じ煉瓦色のタイル貼、上階へ行くほど利用者が少なくなることから面積を減衰させた各階ホールは外的内部の設えだ。

この建築の注目すべき空間構成の画期的な特徴は、バウハウス校舎のように諸室を平面割り付けとするのとは異なり、機能別に独自の最適空間を探り出し、それぞれに個別の架構を当て、階段、昇降機の縦動線シャフト共に分節して、人の動線と物・材料の搬出入経路、構造の合理性などを基に、全体を立体的に高度に統合したことである。



北側からの外観
左下、基壇。その上部、階段教室と事務棟。右側、実験工作室



垂直、水平方向のサーキュレーション図
a エントランス・ホール b 事務棟 c 実験室棟
d 実験工作室 e クローク、トイレ内蔵基壇



左上 エントランス・ホール2階
左下 事務棟内部

右上 3階ラウンジ
右下 実験工作室